

北海道バイオ工業会セミナー 北海道における保健機能食品の 開発の現状と展望

2017年5月31日現在、「機能性表示食品」の届出数は930件を数え、その数は急激な伸びを見せています。本制度は、臨床試験を行わずともシステムティックレビュー（SR）と呼ばれる文献レビューによって届出ができる点が特保との大きな違いとなっており、94%がSRによる申請となっております。

本セミナーでは機能性表示食品におけるSRならびに細胞を用いた新たな機能評価技術についての現状をまとめ、そこから見える今後の展望や課題点についてお話しします。

日時 平成29年6月26日(月)14:30~16:30

会場 コラボほっかいどう大会議室 (札幌市北区北21条西12丁目
TEL: 011-708-6392)

14:30~14:40

「イントロダクション

ー保健機能食品開発の社会的役割と開発支援ー」

北武臨床株式会社 代表取締役 金内 正俊 氏

14:40~15:10

「核内受容体アッセイ法を用いた黒米の活性評価」

株式会社 ジェネティックラボ 先端医療事業部
部長代理 宮本 顕友 氏

15:10~15:40

「核内受容体アッセイ評価からの動物を用いた検証

ーメタボリックシンドロームに対する動物での検証ー」

株式会社新薬リサーチセンター 非臨床研究部
副部長 今野 誠 氏

15:40~16:30

「機能性表示食品のシステムティックレビューの現状と展望」

北武臨床株式会社 臨床開発部 宮下 博樹 氏

主催： 一般社団法人北海道バイオ工業会

後援： 公益財団法人北海道科学技術総合振興センター

参加無料

講演概要

1. 「健機能食品開発の社会的役割と開発支援」

社会的背景と規制当局の方針（医療制度が抱える問題と今後の展開方向）、保健機能食品市場の推移および食品開発メーカー様に対する北海道バイオ工業会としての開発支援概要について報告します。

2. 「核内受容体アッセイ法を用いた黒米の活性評価」

食品の機能性を明らかにするためには、一般に食品中の機能性成分の分析・分画から始まり、細胞培養試験、動物試験、ヒト介入試験などを経て、その“機能性の科学的根拠”を明らかにする必要があります。しかし、それらに要する費用は莫大で、食材に含まれる機能性物質の評価や新たな探索の障害となっている。

核内受容体は、細胞内に含まれるタンパク質であり、外部から細胞内に取り込まれた物質が結合すると、核内に移行しDNAに直接結合して遺伝子転写を制御する転写因子である。また、核内受容体は極めて多くの遺伝子転写を調節しているため、このような核内受容体と結合する物質（リガンド）は生体に強い作用をもたらす。

この機能を利用した核内受容体アッセイ系は、食品中に含まれる物質がヒトに対してどのような影響を及ぼすかを予め推定することが可能であるため、食品などの機能性物質の動物試験またはヒト介入試験の一次スクリーニング系として利用することにより、製品開発コストの大幅な低減が期待される。

本発表では、黒米抽出物を例として、哺乳動物細胞株を用いた核内受容体アッセイの評価系を紹介いたします。

3. 「核内受容体アッセイ評価からの動物を用いた検証 ーメタボリックシンロームに対する動物での検証ー」

核内受容体アッセイ法を用いた活性評価結果が、動物実験で有効性を示すかを検証した。実際に、黒米を用い実施したin vivoでの検証方法ならびに評価結果の報告を中心に、メタボリックシンロームに対する動物での検証方法等について紹介します。

4. 「機能性表示食品のシステマティックレビューの現状と展望」

2017年3月31日現在機能性表示食品の届出数は815件を数え、その数は急激な伸びを見せている。臨床試験を行わずともシステマティックレビュー（SR）と呼ばれる文献レビューによって届出ができる点が機能性表示食品と特保の大きな違いとなっており、これを用いた届出が全体の94%を占めている。本講演では機能性表示食品におけるSRについて現状をまとめ、そこから見える今後の展望や課題点についてお話しします。